



第69回 “社会を明るくする運動”

明石地区推進委員会 高校生エッセイコンテスト優秀作品

(明石市:優秀賞/兵庫県:更生保護女性連盟会長賞)



更生できる社会をつくる



兵庫県立明石北高等学校 西岡 信樹

みなさんは犯罪をした人の更生について考えてみたことがあるだろうか。僕はあまりそういうことについて考えたことがなかったが、この夏、いい機会に出会った。

先日、兵庫県司法書士会が主催する1日司法書士体験に参加した。そこで裁判の傍聴体験があり、覚醒剤を使用してしまった人の刑事裁判を傍聴した。被告には反省したいという意味、更生したいという気持ちがあったことなどを考慮した上で判決が下された。

しかし実際のところはどうか。罪を犯した人が「更生したい」という気持ちをもっていたとしても、実際は難しいのが実状である。罪を犯してしまった人と一緒に働くのは怖い。だから避けてしまう。そう思う人だって多いだろうし、僕もそう思わないわけではない。その人が心から反省していたとしても、「前科」という経歴のせいで人として生きていけないことだってあるかもしれない。特に薬物依存はまずその薬物と縁を切ることから更生が始まり、他の犯罪に比べて更生に時間がかかり更生するのが難しい。

ではそもそもこういった犯罪も含めた犯罪者の数を減らすためにはどうしたらいいのだろうか。僕は周りの人の力が不可欠だと思う。何か異変があるのならそれを見て見ぬふりで終わらせるのではなく、本人に「どうした

の？」と聞いてみる。1人じゃ無理なら誰かに相談する。犯罪者だって自らすすんで罪を犯す訳じゃないだろう。きっと心のどこかに不安や悩みがある。それを誰かに聞いてほしいはずだ。罪を犯す前に助けてあげたいと思う。

罪を犯してしまった後の更生を支援するためには何が必要か。それは社会整備だと思う。社会整備といっても、更生するための施設や制度はもちろんだがそれだけではない。人々の理解を得ることも重要だと思う。例えばなぜ覚醒剤に手を出してしまったか、なぜ更生したいのかなどを聞いて、その人と向き合うことである。更生するチャンスを与えてあげることが必要なのではないか。

また更生しづらい現状があるということを知ることが少ないようにも思う。間違った知識をもったままだったらさっき言ったような社会を作ることはできないだろう。そしてその機会をできるだけ若いうちに与えたいと思う。特に若者は、誤った知識から薬物に手を出しがちだと保健の授業でも習った。心が不安定な時期ということも理由の1つかもしれない。だからこそ、私たち高校生や中学生のうちから薬物依存や更生について学ぶ必要があると思う。私たち高校生などの若者から主体的に学び、声をあげていく。声を広げていく。そういうことが私たちにできることなのではないかと思う。

私たちにできることは小さいかもしれない。でも、小さいことをあわせればやがてそれは大きな力となる。その力が心から更生したいと思っている人の手助けとなり、1人でも多くの方が更生して人として豊かに生きていける社会をつくっていきたい。